

## 5回目の春を迎えて思うこと

労働者委員 榮留 道夫

私のコラムが掲載されるのは、桜も散り、ゴールデンウィークの真直中の頃で、県民の皆さん方は、旅行や帰省、家族サービスや自分の趣味などを満喫されていると思います。

五月晴れの下を子供たちが楽しそうに大声を挙げて走り回っている姿が目浮かぶようでもあります。

さて、2011年3月11日、私たちはこれまで経験したことのない自然災害を目の当たりにしました。それは、多くの人命と財産を奪っていき、この春とは全く違う状況を創り出したのであります。あれから5回目の春を被災地は迎えました。被災3県においては、復興してきたとの実感が半数を超えたとのアンケート調査もあるようですが、地域によっては全く手つかずの所もあります。

今回の災害で保護者が死亡・行方不明で遺児・孤児になった人は約2千人とされています。一瞬に家族団欒の場が消え、悲しみに打ちひしがれる暇もなく今この時を生きていかななくてはならない子供たちがいることを私たちは忘れてはいけません。

ところで、私は何かの縁でこの子供たちに「ささやかな支援」をさせてもらえる機会を得ました。見ず知らぬ人から見ず知らぬ子供たちに対しての支援は、いろいろなところで行われています。

しかし、思いもしなかった災害によって一瞬にして親を亡くした子供たちがこれから数十年この世で生きていく中で、幼少期や青年期は極めて子供たちにとって重要な時期であります。親を亡くしたという現実に向き合い、「生きていく」という心の強さを持つためにどのようにすればよいのか。被災にあった子供たちのすべてがそのような考えに陥ったのではないのでしょうか。

そこには、大人たちの支援、励ましの言葉、子供同士の助け合いの中で、改めて「生きていく」という希望を持った子供たちも多くいるのではないのでしょうか。

私は、今後ともできる限り、東日本大震災で遺児・孤児になった方々をはじめ、同じような待遇になっている子供たちに「ささやかな支援」を行っていくつもりであります。

今や日本は、富裕層と貧困層に2極化したと言われています。

子供の貧困割合は6人に1人であり、親の貧困が子供に引き継がれるという負の連鎖も高い割合であると言われています。

私たち大人の使命は、一人でも多くの子供たちの生活環境や教育環境などを創り出していくことでもあります。助けを求めている子供たちは、日本だけではなく世界各地にいます。自分自身でできる「ささやかな支援」を見つけて私たちは「生きていく」必要があります。

県民の皆さん方もいろいろな形でいろいろな方々に「支援」をされていると思います。

そのことの積み上げが多くの人を「人として当たり前の生活」ができる世の中を創ることに繋がることだと確信しています。

是非、できる限りの「支援」を続けられ助けられることを願います。